

<今回>319回目 2022年12月5日(月)14時~17時 601会議室
読書は10冊目「失われた九州王朝」再読 p402、昭和の学説 より

<前回>318回目(22-11-5)出席者8名

資料(22-11-25-1)前回のまとめ(清水)

一2)宋史日本伝の神統譜のポイントと比較表

A 報告 今回からまた清水のやり方で読書会を続けます。皆さま読書会を継続していただき、まことにありがとうございます。本年中は引き続き金銭面の事務事項を山本充子さんをお願いします。

午前中藤田隆一氏のweb講座「古代史の会」があり、(毎週金曜日10時から11時半)今回は関西の服部静尚氏の邪馬台国は近畿ではありえないとする最近の考古学者の説を紹介してくれました(powerpoint20頁以上の資料)纏向遺跡には宮都を構成する遺跡はいまだに出ないそうです。それに引き換え北部九州には比恵那珂遺跡など有力な場所が発見されているという内容でした。私は古田説が出た当初、もう文献学者で古田説に敵う者はいない。あとは考古学者の近畿説に頑張ってもらわねばならないという論を聞いた覚えがありますが、考古学会も九州説に手を挙げたのですかと質問しましたが、有名なこの考古学者寺沢薫氏、久住輝彦氏も考古資料は九州だが、古来宮都は近畿であり、否定はできないと答えられたと言いました。まだ考古学会では7分が近畿説だそうです。宮都には3千人~5千人ぐらいの人口痕がないとおかしいという論拠です。邪馬台国東遷説の再来です。奈良女子大学「東アジアにおける都市の成立(21世紀 COE プログラム報告書 Vol. 22. 2008)からの資料だそうです。

B 資料 中国の宋に日本僧喬年が擁熙元年(894年)に提出した平安時代の日本国の「王年代記」の神代の部分の王統譜である。ポイントと古事記、日本書紀との比較表を作成した。奈良、平安時代に6回も日本書紀の講義を開催して、周知を図ったが、平安後期でもこのような神統譜が海外に示されているのはどういうことか。(神武以下64代円融天皇まで書かれているがそれは省略した)

C 読書 朝日文庫版 408p 明治の学界 より

- 1) 明治17年栗田寛の「逸年号考」によって偽物と処断された。栗田は「大宝」以前の「古代年号」について、「多くは中古以来僧徒の人の国(中国大陸)へいききのおほきありし頃より、皇国の古代に紀号(年号)の無きを厭わぬ事(いやなこと)に造出したるものにあらん」。鶴峰の「襲国偽潜考」は文政3年(1820年)大阪の難波で書かれ、出版された。これに対して栗田は水戸で生まれ、後年明治25年東京帝国大学文科大学教授となり、国史法制を講じ、明治の学界の中央を代表する立場に立った。したがって栗田の発言は断然たる重みで、現代まで続いて、学界の「定説」になっている。
- 2) 栗田の「僧徒造作」説は、現在も「定説」となって続いている。彼は後年に水戸の彰表館に入り、水戸学の「大日本史」の編集を継続している。水戸学を明治の学界に継承している。外装は近代史学、中身は封建制の水戸学の史学の矛盾を古田は明治史学の体質と見た。

次回2022年12月23日(金) 14時から17時 601会議室
2023年1月16日(月) 14時から11時 602会議室